

音楽学会第 62 回全国大会 発表要旨

2011 年 11 月 6 日 Session H-1, 10:00-12:00

社会ダーウィニズムとドヴォジャーク チェコ社会における音楽の「進歩」と「退化」

福田 宏（東日本支部）

本報告は、ドヴォジャークをめぐる言説を分析することにより、19 世紀チェコにおける社会ダーウィニズムと音楽の関係に焦点を当てようとするものである。

当時においては、適者生存や優勝劣敗の発想が人間社会にも適用され、植民地支配や人種差別が科学理論のレベルで正当化されつつあった。音楽との関連で言えば、チェコ地域出身のドイツ系音楽学者であったヴァラシエク（Richard Wallaschek）が重要である。彼によれば、未開人種であっても教育によって進歩を加速させ、高次元の芸術を獲得させることが可能であった。彼らもまた、チェコ人・ポーランド人・ハンガリー人といった発展途上の諸民族がそうであったように、自らの民族舞踊を真の普遍芸術へと昇華できるはずであった。その点において、スメタナやドヴォジャークは、辺境民族の文明化を音楽の面から実現した功労者だったのである。

だが他方では、ドヴォジャークの作品を退化の象徴と見なす論者もいた。ウィーンの音楽界では、彼はオリジナルに欠ける作曲家と見なされ、他人からアイデアを借用しただけではないかと批判されていた。よく指摘されるように、ウィーンの楽壇が概してドヴォジャークに冷たかった背景には、ハプスブルク帝国におけるドイツ人とチェコ人の対立という要因もあっただろう。しかし、当時の「進歩的な」聴き手が許せなかったのは、何よりもまずドヴォジャークの「大衆性」だったのではないか。20 世紀初頭のチェコ社会において展開されたスメタナとドヴォジャークをめぐる激烈な論争もまた、こうした進化と退化をめぐる言説が背景にあったと思われる。

なお、本報告は『フィルハーモニー』2010 年 6 月号に掲載された小論（ウェブサイト <http://hfukuda.cool.ne.jp/muzika/muzika13.htm> に転載）を発展させたものである。